

- B9.1 方式 [1] 無変化 (136)
- B9.2 方式 [2] 態変換 -e- による態変換 (140)
- B9.3 方式 [3] 態補強 -e- / -i- による態補強 (148)
- B9.4 方式 [4] 新自動詞形成(1) -ar- による新自動詞形成 (158)
- B9.5 方式 [5] 新自動詞形成(2) -ar-e- による新自動詞形成 (162)
- B9.6 方式 [6] 新他動詞形成(1) -as- による新他動詞形成 (166)
- B9.7 方式 [7] 新他動詞形成(2) -as-e- による新他動詞形成 (170)
- B9.8 方式 [8] 新他動詞形成(3) -s-e- による新他動詞形成 (174)
- B9.9 方式 [9] 対自原因(1) -as- による敬語動詞形成 (178)
- B9.10 方式 [10] 対自原因(2) -as-e- による敬語動詞形成 (182)
- B9.11 方式 [11] 新自動詞形成(3) -ay-e- による新自動詞形成 (186)
- B9.12 方式 [12] 非o格客体の主体化 (192)

あとがき (199)

主要参考文献 (203)

索引 (207)

- | | |
|-----|--|
| コラム | 1 可能動詞「書ける」は「書き得る」から生じたか? (32) |
| | 2 スペイン語・ロシア語の中動態 (44) |
| | 3 二段活用の語幹は xxx;u- か xxx;ur- か (131) |
| | 4 「居る wi-」は原動詞か (147) |
| | 5 受影基 -(r)ar;e- と
可能動詞（下二活用助動詞ル・ラル） (165) |
| | 6 原因基としての -(s)as;e- (助動詞セル・サセル) (177) |
| | 7 動詞「得（う）」の原動詞は「y-」か (185) |

コラム1 可能動詞「書ける」は「書き得る」から生じたか？

可能動詞はいろいろな子音幹動詞（五段動詞）から作られる。たとえば「読む・話す・泳ぐ・勝つ・走る」から「読める・話せる・泳げる・勝てる・走れる」が作られる。この可能動詞がどのように発生したかについて、こう考える立場がある。……たとえば、「書ける」は「書く」という動詞に、可能を表す動詞「得る」が付いたものであり、「書き得る」が基になって、変音して「書ける」になったものである、と。

しかし、動詞が可能を表せるようになったのは、下二段に活用する受影基（助動詞）「る -ar; e-/ -ar; Ø-/ -ar; ur-」のおかげであった。「書く kak-」という動詞にこれが付くと、

書かれ kak-ar; e-Øi, 書かる kak-ar; Ø-u, 書かるる kak-ar; ur-u のようになり、受身、自發、尊敬の意味とともに可能の意味が表せた。これが、室町時代ごろになると、可能・自発の意味を中心に -ar- が省略されて許容態 (-e-/ -ur-) だけでも意味が保てることが分かり、省力が行われて、次のようにになった。

書け kak-æ; e-Øi, 書くる kak-æ; ur-u, 書くる kak-æ; ur-u
(室町時代には終止形もurを使用)

そして江戸時代には ur が e に統一されて、今日のようになった。

書け kak-æ; e-Øi, 書ける kak-æ; e-ru, 書ける kak-æ; e-ru
だから可能動詞の成立に関しては「得る e-」は関係がないのである。

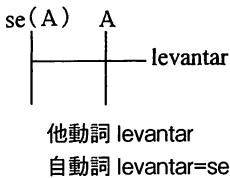
また、湯澤（1991:243）によれば、江戸時代には（「まつる」の書き方が下手で）「まぐろト読る」、「気が様て」、「天窓がやめて」（頭が病めて）のように「自発」の意味の使い方もあったということであり、これを「得る e-」で説明することはできないから、ますます「得る」は関わりがないということになる。

可能動詞を形成する許容態 -e- は今日でも「可能」と「自発（自然生起）」の意味を持っている（B3章）。

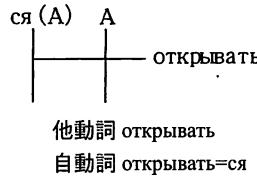
「得る」に関してはコラム7（p.185）も参照されたい。

コラム2 スペイン語・ロシア語での中動態

日本語の態補強を「自分で自分を許容する」という形の「中動態」ととらえると、スペイン語やロシア語の中動態との異同が気になる。スペイン語では、たとえば *levantar*（起こす）という他動詞に自分で自分を表す再帰代名詞 *se* を付けて *levantar=se* とすると、「自分で起こす」つまり「起きる」という自動詞になる。これを構造で表せば図Bコ2-1のようになる。*mover*（動かす）も同様に *mover=se*（動く）になる（態変換の要素もある）。



図Bコ2-1



図Bコ2-2

ロシア語の場合も似ている。*открывать*（あける）という他動詞に、再帰代名詞 *себя*（自分）に由来する接尾辞 *ся* を付けて *открывать=ся* とすると、「自分であける」という意味から「あく」という自動詞になる（図Bコ2-2）。同様に *утомлять*（疲れさせる）は *утомлять=ся*（疲れる）になる（態変換の要素もある）。

スペイン語やロシア語の中動態は再帰代名詞・接尾辞を使用しているところに特徴がある。これは日本語で中動態を構成するのが態の「属性」であることと対照的である（態変換として考えても同じことがいえる）。

また、同じく「中動態」といっても、日本語の態補強では自動詞は自動詞のまま、他動詞は他動詞のままになるから、スペイン語・ロシア語の中動態とは性質が異なっている。

このことに関しては、今後の対照研究を課題したい。

コラム 3 二段活用の語幹は xxx;u- か、xxx;ur- か

二段活用の動詞にはたとえば「開くる akuru」という他動詞がある（意味は「開ける」。室町時代の終止形）。これは「開く ak-」という自動詞に許容態形式が後接してできたものであるが、この形式を形態素分析しようとするとき、許容態の形式として -u- と -ur- のいずれを探るかによって分析結果が異なることになる。連用形は ak;e-Øi，命令形は ak;e-yo，終止形は ak;Ø-u であって、これらの活用形には uru 部分がないので、ここで取り上げるのは連体形と已然形となる。

① -u- と考えると [連体] ak;u-ru [已然] ak;u-re となり、

② -ur- と考えると [連体] ak;ur-u [已然] ak;ur-e となる。

どちらの可能性もあるが、本書では ② の -ur- を採っている。それは、日本語の態を表す形式は「母音+子音」の 2 音素でできているからである。
 -ar- がそうであり、-as- がそうである。二段活用の許容態連用形は -e- ないし -i- の 1 音素で、2 音素ではないではないかとの反論があるかもしれないが、これは -ay- (-öy-, -uy-) という 2 音素の許容態の連用形 -ay-i (-öy-i, -uy-i) が変音したものであり (B7.1, B7.2)，許容態そのものは 2 音素なのである。また、別に、-rar-, -sas- という 3 音素の態形式があるのでないか、との反論も考えられるが、これは態拡張した動詞の語幹が e や i の母音で終わるようになったので、これに -ar-, -as- を続ける際に母音連続回避のために子音を介入させたものである。介入子音音素は、補助的なものであるので、() 内に示すことになり、-(r)ar-, -(s)as- のように表記する。本来的な態形式はやはり -ar-, -as- の 2 音素から成るのである。また、-u 末語幹というものは日本語に存在しない。

このようなわけで、許容態形態素は 1 音素の -u- ではなく、2 音素から成る -ur- であると、本書では考えている。

コラム 4 「居る wi-」は原動詞か

奈良時代に「居る / ゐる wi-」という動詞があった。これは現代語の「居る / いる i-」につながる動詞であるが、これが奈良時代において原動詞であったかどうかについて考えなければならない (B8.3⑦)。

この動詞は、意味は「立つ」の反対で、「立っているものや動いているものが、ある所に座ったりとまつたりする」ことを表していた。

奈良時代においては上一段活用であったので動詞語幹は wi- であったが、それ以前の活用としては、終止形に「う w-u」が認められている。それで、以前は上二段活用動詞であったものが上一段活用化したのであろうと推測されている (『岩波古語辞典』「ゐ」など)。この推測に基づけば、次表のような変遷を推定することになる (ただし、-ur- の存在は不明)。

表 Bコ4 動詞「ゐる wi-」の変遷推定表

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記 1	w-i	w-u	w-u	w-e	w-i-yö
前記 2	w;i-Øi	w-u	w-u	w-e	w;i-Øi-yö
前記 3	w;i-Øi	w-u	w;ur-u	w;ur-e	w;i-yö
前記 4	w;i-Øi	w;Ø-u	w;ur-u	w;ur-e	w;i-yö
奈 良	w;i-Øi	w;i-ru	w;i-ru	w;i-re	w;i-yö

この推定表では、終止形が許容態 ;ur- 形式の段階 (通常は鎌倉・室町) を飛び越えて一気に ;i- 形式を取っている (通常は江戸)。それで思い起こされるのは「蹴る」である。「蹴る kuw;e-」(表 B8-2) では奈良時代が上表の前記 4 の段階に当たり、平安時代が上表の奈良の段階に当たる。両者に共通するのは終止形に ;ur- の段階がないということである。これが前記録時代～平安時代の二段活用一段化の特徴であるといえる。原動詞は、w- であり、kuw- であるわけである。

同様のこととは「ふ (干・乾・曬) h-u」という上二段活用動詞が一段化してできたといわれる「ひ (干・乾・曬) h;i-」についても言える。

コラム 5 受影基 -(r)ar;e- と可能動詞 (下二活用助動詞ル・ラル)

受影基 (旧受動基) -(r)ar;e- は、原動詞であれ態拡張動詞であれ、動詞に外部から (A) 受動・自発、(B) 可能・尊敬の意味を付加する形式である。 (A) では -e- が対自許容として機能し、(B) では -e- が対他許容として機能し、両者とも -(r)ar;e- が一体化して 1 属性のようになる (『文法』12.5)。この受影基の変遷を表に示してみたい。未然形は語幹を示すだけなので、この表では省略する (B7.4 奈良(2))。

表 Bコ5 受影基-(r)ar;e-の変遷

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	-(r)ay;e-Øi -ar;e-Øi	-(r)ay;Ø-u -ar;Ø-u	-(r)ay;ur-u -ar;ur-u	-(r)ay;ur-e -ar;ur-e	- -
平安	-(r)ar;e-Øi	-(r)ar;Ø-u	-(r)ar;ur-u	-(r)ar;ur-e	-(r)ar;e-yo 尊
室町	-(r)ar;e-Øi	-(r)ar;ur-u	-(r)ar;ur-u	-(r)ar;ur-e	-(r)ar;e-yo 尊
江戸	-(r)ar;e-Øi	-(r)ar;e-ru	-(r)ar;e-ru	-(r)ar;e-re	-(r)ar;e-ro 受

現代語ではたとえば yom- という子音幹動詞は次のようになる。

yom-ar;e-Øi, yom-ar;e-ru, yom-ar;e-reba, yom-ar;e-ro
mi- という母音幹動詞は子音 r の介入があり、次のようになる。

mi-rar;e-Øi, mi-rar;e-ru, mi-rar;e-reba, mi-rar;e-ro

子音幹動詞の場合は「(B) 可能」の意味のとき、-ar- が省略されるのが普通である。これは許容態 -e- / -ur- の許容機能のみでまかなうための省力で、室町時代末ごろから徐々に始まったようである (湯澤 1981 : 227等)。

yom-æ;e-Øi, yom-æ;ur-u, yom-æ;ur-e(do) (室町時代)

yom-æ;e-Øi, yom-æ;e-ru, yom-æ;e-reba (可能是命令形なし)

母音幹動詞の場合も「(B) 可能」の意味のときは -ar- が省略されることがあるが、このときは「ラ抜き」として非正規扱いになることが多い。

mi-ræ;e-, mi-ræ;e-ru, mi-ræ;e-reba

コラム 1 (p.32) も参照されたい。

コラム 6 原因基としての -(s)as;e- (助動詞セル・サセル)

複合原因態として機能する原因基（旧使役基、助動詞）の -(s)as;e- は、原動詞である、態拡張動詞である、動詞に外部から「直接他動・指示他動・結果将来・不阻止」の意味を付加する要素である。これについてはB4章で触れているが、ここでこの原因基の変遷を表に示してみたい。同じく使役関係に使用される「しむ -asim-」も示しておく。

未然形は語幹を示すので、この表では省略する (B7.4 奈良(2))。

表 Bコ6 使役基としての -(s)as-e- の変遷

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記	-as-i	-as-u	-as-u	-as-e	-as-i-yō
	-asim-i	-asim-u	-asim-u	-asim-ē	-asim-ē
奈良	-as;e-Øi	-as;Ø-u	-as;ur-u	-as;ur-e	-as;e-yō
	-asim;ē-Øi	-asim;Ø-u	-asim;ur-u	-asim;ur-e	-asim;ē
平安	-(s)as;e-Øi	-(s)as;Ø-u	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-e	-(s)as;e-yo
	-asim;e-Øi	-asim;Ø-u	-asim;ur-u	-asim;ur-e	-asim;e-yo
室町	-(s)as;e-Øi	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-e	-(s)as;e-yo
	-asim;e-Øi	-asim;ur-u	-asim;ur-u	-asim;ur-e	-asim;e-yo
江戸 前期	-(s)as;e-Øi	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-e	-(s)as;e-yo
	-(s)as-i	-(s)as-u	-(s)as-u	-(s)as-e	-(s)as-e
江戸 後期	-(s)as;e-Øi	-(s)as;e-ru	-(s)as;e-ru	-(s)as;e-re	-(s)as;e-ro
	-(s)as-i	-(s)as-u	-(s)as-u	-(s)as-e	-(s)as-e
現代	-(s)as;e-Øi	-(s)as;e-ru	-(s)as;e-ru	-(s)as;e-reba	-(s)as;e-ro
	-(s)as-i	-(s)as-u	-(s)as-u	?-(s)as-eba	?-(s)as-e

平安の(s)の出現は態拡張による母音幹動詞の発生を物語っている。

江戸前期において許容態の省略が見られる。これは形の上では前記録時代、五段活用への回帰ということになる。いったん取り込んだ許容態を返上する現象はナ変動詞「死ぬ」にもある (B8.4i)。

なお、-asim;e- は室町よりあとは省略してある。中世以後文章語として使用され、特に近世以後は会話では全く用いられなくなった (『日本文法大辞典』「しむ」)。

コラム7 動詞「得（う）」の原動詞は「y-」か

現代語には「得る e-」という動詞があるが、これは奈良時代には終止形が「得 Ø-u」という形の、不思議な下二段活用動詞であった。活用は次表のとおりであり、ここには考えるべき問題が存在している。

表 Bコ7-1 動詞「得 Ø-u」の奈良時代の活用表

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈 良	え (甲) ě-Øi	う Ø-u	うる ur-u	うれ ur-e	え (甲) よ (乙) ě-yö

①語幹部はすべて許容態詞のみである。原動詞はないのか。

②許容態の e は乙類 ě のはずなのに、なぜ甲類 ē であるのか。

この現象を合理的に説明するためには次のように考えることになる。

①許容態はある原動詞に作用するのであるから、この時点では省略されていた原動詞が以前存在していたはずである。②その原動詞末は乙類 ě を甲類 ē にしたのであるから、口蓋化要素のある y 音であったはずである。また、省略されやすかったのであるから、原動詞末は y 音のみであった可能性が高い。それで、原動詞は y- であったと推定できる。とすれば、あとは理論的、自動的に次の変遷を推定することができる。

表 Bコ7-2 動詞「得 Ø-u」の変遷推定表

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記1	y-i	y-u	y-u	y-e	y-i-yö
(前記2)	y; ě-Øi	y-u	y-u	y-e	y; ě-yö
前記3	y; ě-Øi	y-u	y; ur-u	y; ur-e	y; ě-yö
奈 良	Ø; ě-Øi	Ø; Ø-u	Ø; ur-u	Ø; ur-e	Ø; ě-yö

『時代別国語大辞典 室町時代編 一』「う 得」の項では、各種資料を検討しつつ、当時は「正常な言い方とは認められなかったとしても、『ユル』の形が実際に行われていたのであろう」と結論づけている (p.655)。存在した「ユル」の形は上の推測の妥当性を支持するものであるのか、あるいは室町時代のア行 (ハ行・ワ行) 動詞から転じたヤ行の下二段活用を反映したもの (岩井 1973 : 53) であるのか、今のところ決しがたい。今後の課題となっている。